

宇宙とセックス：Sex in Space



Laura S. Woodmansee 著
紺野拓人 訳
(宇宙ジャーナリスト)

訳者まえがき

本書は、宇宙でのセックス、無重力でのセックスという、これまで禁断ともいえるテーマについて真剣に向き合って書かれた初めての本と言えます。日本人の感覚からすると、内容は多少露骨と思える部分も含まれていますが、あくまで科学的な視点で『宇宙でのセックス』、『宇宙とセックス』を女性の目、女性の感性、女性固有の視点で書かれていると言えます。そのため、これまで宇宙は難しい、理解できない、文系には縁遠いなどと考えていた女性にはとくにお読みいただくことをお勧めいたします。宇宙開発の新しい見方に驚きを感じると思います。また、宇宙は科学的で純粋な分野で夢を与える活動とお考えの方には宇宙とセックスというテーマに違和感を抱くかもしれません。しかし、人類が地球上で繁栄し今日まで存続できたのはセックスが可能であったからで、将来の宇宙活動の永続、宇宙での人類の繁栄にはセックスは人間にとって欠かせない行為であることも事実です。硬派のドキュメンタリーテレビ番組、「ディスカバリーチャンネル」では宇宙の生活をテーマにした放送を時々流しています。そのビデオの中では必ずと言っていいほど”宇宙とセックス”に関する話題が含まれています。このことから見ても”宇宙とセックス”のテーマは宇宙での生活にとって重要

な課題であり無視できない問題なのです。

著者は米国の女性ジャーナリストであり作家であるルーラ：ウッドマンシイ (Laura S. Woodmansee) 女史。多くの宇宙関係者のインタビューから得た情報を背景にしたジャーナリスティックな内容です。彼女は本書以外にも女性宇宙飛行について何冊か執筆しています。

本書には宇宙活動家 (Space Activist) と呼ばれている人達がたくさん登場します。日本では宇宙活動家と呼ばれる人々はほとんど存在しませんが、宇宙に興味を抱いて何らかのかかわりを持たれている一般の人は沢山います。宇宙活動家とは政府宇宙機関や宇宙開発企業で実際に宇宙開発にたずさわらず、自らの意思で宇宙探査や宇宙開発活動を行っている人々です。宇宙について素人ではありませんが、別の専門知識を持ちながら宇宙活動についての知識を積極的に吸収し、新鮮な視点で宇宙について語っています。

それでは、この本を手に取り、宇宙の新時代、女性の宇宙の時代、女性のための宇宙旅行、宇宙と新婚旅行、宇宙とセックス、宇宙での受精、妊娠、そして出産といった新しい宇宙の世界に入ってみましょう。

本書で描かれているような無重力の性交渉の体位は、今世紀中の宇宙旅行では必要かもしれませんが、未来でも必要であるかどうかは不明です。事実、すでに体外受精技術も発達し、いずれ体外での胎児育成も可能となれば、無重力セックスは不要となる可能性もあります。セックスなしで子孫存続も可能となるのです。そうなると、残るは生理的本能機能として性感を満足させればよいことになります。将来は男女の性的結合が文化的人間学的に時代遅れの行為となり、性感を満足させる新しい手法が発明され、精子と卵子の生産以外の性的肉体機能が人間の体から衰退してゆくかもしれません。或いは精子と卵子さえも人工的に再生産可能となり、遺伝子の設計通りに成長する人体を生む出すことも可能でしょう。

未来の宇宙で、人間の“宇宙セックス”がいかなる方向に変化するのか、宇宙科学と共に宇宙文化人類学や宇宙生理学、宇宙医学、宇宙生物学等の新しい分野の研究テーマの一つとして大変興味のあるところです。

紺野拓人

著者まえがき

宇宙とセックス、これは時代の流れですので隠すことはないのです。新宇宙時代に突入している現在、民間企業が独自の宇宙船を開発し、独自に宇宙ホテルまで開発をしている時代が訪れているのです。本書を読まれると、宇宙ホテルの宿泊客となるみなさんが、“よし一緒に行こう、200キロメートル上空の宇宙の仲間になろう！”と必ずや思っただけだと信じています。宇宙観光の時代は必ず訪れます。宇宙がラスベガスやバハマのような観光地になる可能性が大いにあるのです。それはカップルにとって一生に一度でもいいから絶対に行ってみたいと思う場所になるのです。数年後にはヴァージン・ギャラクティック社（高度100キロメートルまで飛行して4分間程度の無重力を体験できる世界初の宇宙観光サービス会社）の宇宙飛行機に乗って最初の宇宙ハネムーン体験者が誕生します。これに続いて、さらに数年後には本当の宇宙ホテルに数日間滞在し、国際宇宙ステーションと同じように地球を回る本当の宇宙ハネムーンが誕生するのです。

そして近い将来には月のハネムーンも実現するでしょう。月面の山脈の上を飛ぶのも楽しいでしょう。ジャンプしながら歩くのも楽しいでしょう。

可能性を語っている段階では想像力は果てしなく広がりますが、でも疑問も頭をよぎります。技術はあるの？ 知識は？ お金を払うだけの価値はあるの？ 愛は強くなるの？ そして、何のために宇宙に行くの？ 宇宙へ定期的に飛ぶようになると、人間は三次元の中でのセックスの喜びを体験するだけではなく、情熱を表現するための全く新しい次元の中でセックスを楽しむようになるのでしょうか？

もちろん、セックスをすれば妊娠と出産もあるわけですが、いつの日か宇宙で妊娠した最初の赤ちゃんが誕生するでしょう。人間の赤ちゃんが宇宙で誕生するかどうかはわかりませんが、いくつかの受精や産卵の実験は行われました。無重力環境では精子と卵子はどうなるのでしょうか？ 細胞分裂の間に何が起きるのでしょうか？ 成長する胎児には骨格が発達するのでしょうか？ あるいは重力に耐え得る血管システムは十分に発達するのでしょうか？ 宇宙で生まれた子供は地球に帰還してから妊娠が出来るのでしょうか？ 地球の重力の3分の1の火星、6分の1の月で生まれた赤ちゃんはどうなるのでしょうか？ 宇宙で生まれた子供が地球に戻った時にまともに成長するには赤ちゃんの時にどの程度の重力があれば十分なのでしょうか？ 月や火星といった地球以外の惑星での生活に順応できる新しい種の人類が誕生するのでしょうか？ 決して地球に戻ろうとしない人は生まれるのでしょうか。あるいは地球の重力が大きいために地球に戻りたくないと思う人間が生まれるのでしょうか？ 部分的な研究はあちらこちらで行われていますが、それでは包括的な視点で行う研究とはどの

ような研究なののでしょうか？ 心配すべきこと、懸念すべきこととは何でしょうか？
全くの憶測の考えや意味もなく恐れられていることは何でしょうか？

これらの疑問にお答えするために本書は書かれました。著者はこの神秘的な世界の扉を開くことに精力を注ぎ、完成するまでに長期間を費やしました。著者は素直で直接的な言葉を使いながら味のある文章に仕上げています。そして重要なことですが、本書のテーマは、覆い隠され検閲によって消されるべきではない内容です。宇宙でのセックスと微小重力環境での出産とは明確に分けて考える必要があります。前者はすばらしい記憶として残るもの、後者は生物としての人間が誕生することなのです。

著者が始めた宇宙とセックスの議論はこれから先も長く続くはずですし続けらるべきなのです。重要なことは、著者が女性であることから、男性には難しい話題を多く語れるのです。歴史を通じてセックスの話題は男性の領域でしたが、すくなくとも「宇宙とセックス」の議論の一部でも女性に引き渡す時代が来ていると思います。それが正しい方向なのです。文化的にタリバンによって女性が顔を覆い隠すことを強要されたり、西側文化でセクシャリティを教えることを巡る闘争が現在進行中であったりするのを見るにつけ、人間のもっとも基本的で本能的と感じる行動がいつも誰かによって間違っていると感じさせられているのです。おもしろいことに、その誰かとは常に男性なのです。興味深い点は、原理主義的な教義の大部分は女性ではなく男性の作り事なのです。好色な考えを持たないように顔と体を黒い布で覆うことを強要する社会制度を動かしているのも男性です。

無知によって闇のように覆い隠されてしまうセックスの話題は、宇宙の領域まで引き継ぐべきではありません。女性の視点で見るセックスの世界は面白おかしくあるべきだと容易に理解できます。この本で書かれているように、女性宇宙飛行士の新しい波が堅苦しい男性中心の宇宙分野を少しでも柔らかくできるのです。柔らかくより受け入れやすい宇宙の見方がマッチョな男の世界を変えてゆくのです。

米国の宇宙開発はライトスタッフと呼ばれた鼻っばしの強いテストパイロットが戦闘機から宇宙船に乗り換え、未開の宇宙フロンティアを突進するというイメージでしたが、これからは人間共同体が未来永劫生き延びるために自然で本能的に人間領域を拡張することが宇宙開発であるというイメージに変わってきています。女性は最初の宇宙開発から部分的にしる貢献してきました。しかし不幸にも女性たちは二流の市民として考えられてきました。さらにひどいことに、肉体的精神的にも男性と同じであるべきという考えで扱われてきました。女性として独自に扱われるのでもなく素晴ら

しい存在としても見られませんでした。もし女性が女性として扱われるのであれば、この驚くべきフロンティアである宇宙に新しい次元をもたらすのです。男性と一緒に仕事をした素晴らしいスペースシャトル女性パイロットや女性宇宙飛行士をたくさん知っています。女性は女性として認め、さらに大きく言えば宇宙は“男性の世界だ”という緊張を少しでも和らげてほしいのです。米国文化の性的機能不全の特性を示す男性の偽善的行為は、胸を連打するサルと一緒に野蛮なサバンナに置き去りにすべきです。

それでは新しい宇宙に女性の視点で入り込み、そして女性の心を開いて眺めてみようではありませんか。セクシャリティと愛のダンスを否定するのではなく歓迎しましょう。この新しい見方をより大きな構想に成長させ、何かを征服するという“フロンティア”の考え方を、ダンスのように楽しむ考え方へ向きを変えようではありませんか。もし機会が与えられるのであれば、次の世代の宇宙訪問者や宇宙探検者は宇宙愛の新しい呼び方、言い方を新たに作り出すでしょう。しかし、最も重要なことは楽しむことです。

目次

訳者まえがき	1
著者まえがき	3
1章 すでに誰か宇宙セックスを? 11	
クラブ“高度160キロメートル”	11
ロシアより愛を	11
宇宙の恋愛	18
宇宙とポルノ	21
その類の宇宙飛行士ではありません	23
宇宙ハネムーン	26
セックス関係以外の出会い	32
単独飛行	34
野性的に	36
無重力とセックス実験	39
2章 宇宙でセックスをする方法 44	
宇宙ベッドルームの火星と金星	44
無重力で恋に落ちること	44
真の宇宙セックス	49
宇宙酔い	51
天人の体へ	53
宇宙スパ (The Space Spa)	56
性的な宇宙ホテル	58
平和で静寂なひととき	59
二人の愛のための宇宙	60
服装について	61
宇宙セックスの方法：常識を超えたセックスの世界	65
宇宙の性典カーマ・スートラ	67
宇宙と性玩具 (大人のおもちゃ)	74
3章 宇宙赤ちゃん その定義、妊娠と出産 79	
女性側の問題	81

男性側の問題	83
放射線	86
受精	90
妊娠	91
出産	95
将来に向けたさらなる研究	96
4章 宇宙とセックス – 知力と欲情	99
宇宙と性欲	99
宇宙と女性の感じ方	101
宇宙と孤独：隔離	105
男性と女性：性別と隔離	106
隔離の四頭立て	107
男女混合乗組員	108
宇宙飛行士心理学：あなたはどのような宇宙飛行士ですか？	109
オーガズムと宇宙飛行士	112
セックスと NASA	114
長期間宇宙ミッションでの性別、セックス、乗組員構成	119
愛のボート（小舟）	123
未来の宇宙文化	125
「無限とその向こう：未来の宇宙とセックス」	127
5章 宇宙観光：究極の恐怖の乗り物	129
現在は何が起きているのでしょうか？	134
宇宙ホテル、私と一緒に行きましょう	139
天国のような寝室	144
私の理想の宇宙寝室	146
未来の宇宙セックス	149
宇宙と定住	153
セクシーな S F（空想科学）	154
終わりに：宇宙定住とセックス	160
参考資料	162

この『宇宙とセックス』はどのような本なのでしょうか？

—一時が熟したアイデアほど、力強いものは無い—

ヴィクトル・ユーゴー：1802～1885 フランス詩人、小説家

本書『宇宙とセックス』を通して、私は宇宙でのセックスと、それに関係する話題について真剣に、しかもオープンに議論しようと試みてきました。例えば、宇宙での性行為体験者の存在、無重力環境でのセックスの体位について、宇宙での妊娠出産について、宇宙そのものについて、宇宙旅行について、などの話題です。

セックスの問題は多くの困惑と当惑を引き起こしますが、私の父が言ったように、「セックスは世界で最も自然なものだよ。」ということです。これは正しいことだと思います。つまり、この本を手にして読むことに困惑する必要も無いし恥ずかしく感じる必要もないのです。私はこの本のカバーに“恥ずかしくない範囲で”と書いたのです。『宇宙とセックス』は大人向けの本ですが、エロティックではありません。でも読みながら顔を赤くして、時々くすくす笑いをしてもかまいません。その方がより人間的だと思います。

私の夫はこの本を冗談交じりに“喜びの本”と呼んでいます。つまり、『宇宙とセックス』は大変重要で真面目な話題ではありますが、ちょうど私が親友と会話をしているように書いています。本書では性的な部分をほのめかし、うわさ話も含め、ときには想像をふくらませています。でも、真実は真実で明確にしています。

この本は教科書ではありませんが、宇宙はどのようなところか、そしてセックスとどのように関係するのかをより深く理解していただくために、すこし理解が難しい文章を含んでいます。私はこのような課題を楽しんで学習しましたし、専門家とも会話をしました。そして、それらの内容を含めてこの本にまとめています。そうはいつでも、本書の目的は読者に楽しんで読んでいただくことであることに変わりはありません。

私が宇宙とセックスについて本を書いていることを友人の一人に伝えたところ、彼は、「ローラ（私の名前）、君は宇宙とセックスに関する本を書く唯一の友人だが、でも最適の人だよ。」と言ってくれました。この言葉は、大きな励みとなり勇気を与えてくれました。本書を読み終えたときに、この言葉に賛同していただけることと思います。

本来宇宙はセクシーでありロマンチックなものです。夜空の美しい星を見ていると明

らかにうっとりとしてきます。暗くなって町から遠くはなれた場所でキャンプを経験した方ならお分かりでしょう。とくに愛する人と一緒ならば、ロマンチックそのものです。広大な未知の世界は神秘的であり、一度は行ってみたいと思うこともあるでしょう。『宇宙とセックス』は、未知の世界でのセックスに対する興味のボタンを押す切っ掛けになることでしょう。

私が『宇宙とセックス』についての本を書くきっかけとなったのは、このセックスという重要な話題に向けられている注目度が低いと感じたからです。宇宙とセックスに関するレポートや記事が沢山あるにもかかわらず、いままで誰一人として一つの書物にまとめた人は居ませんでした。宇宙に興味のある人は、少なくとも一度は感心を抱いたでしょうし、それがどのようなものか、そして経験者が居るのかどうか、といった疑問も抱いたことでしょう。宇宙でのセックスをだれも経験したことが無いので書物も無かったと言うことかもしれません。でもこれは、卵とニワトリの関係かも知れません。誰かが宇宙でセックスが可能だと考えたときに、いくつかの疑問がわいてきます。まずは、最初の疑問、“宇宙でセックスを経験した宇宙飛行士はいるのでしょうか？” このことについては沢山の事実とフィクションが存在します。第1章ではこの話題について述べています。

第2章では宇宙でセックスをする方法について書いています。宇宙でのセックスを理解するために、まずは宇宙について理解を深めることが必要だと思います。これを理解してから、宇宙ホテルに宿泊するときの問題点を明らかにします。例えば、セックスの時の衣服、使える性の体位と使えない体位、そして使用可能な性玩具(いわゆる大人のおもちゃ)等です。

第3章では宇宙での出産について考えます。これは第2章よりも若干真剣な話題となります。男女の生殖機能に与える宇宙の影響について考えます。そして宇宙での出産の可能性や課題、さらに宇宙での受胎、妊娠、出産の結果について考えてみます。

第4章では、宇宙生活に影響する心理的な問題を考えます。とくに長期宇宙飛行における異性関係や異性同士の肉体的関係の影響について焦点を当てて考えてみました。

最後の第5章では、将来のことを少し考えてみたいと思います。現在、宇宙観光ビジネスで起きていることや、ロマンチックな宇宙開発で将来に向けて何が必要なのか考えてみたいと思います。そしてより安価な打上げロケットを開発している人々を紹介し、さらに未来の宇宙ホテルが提供するサービスを想像してみましよう。最後に、セッ

クスと空想科学（SF）について考え、遠い未来の宇宙を見てみることにしましょう。

私達は宇宙観光の時代、長期宇宙飛行の時代に突入しようとしています。セックスに関してはなにも恥ずかしく思うことはありません。もっともちょっとは笑ってしまうかも知れませんが。人間がいかなる場所に行こうとも、セックスと出産は必ずついて回ります。そのため、宇宙での人間性の自然な結末を考える準備をしておいた方が良いでしょう。

この本の多くの読者は、本書をおもしろ半分に読むか、興味をそそられるか、あるいは感激するか、どれかだと思えます。しかし宇宙観光に興味を抱いているカップルにとってたいへん利用価値のある本だと思います。そして、宇宙観光事業への投資を検討したり、宇宙産業起業家に将来のビジネスチャンスを考えたり、SF作家にアイデアを提供したり、さらに、未来の宇宙居住に向けた開発計画を検討するために役に立つかも知れません。

最近、宇宙起業家会議という面白い集いに参加する機会を得ました。この会議は「宇宙億万長者」というタイトルで、主催は南カリフォルニア大学でした。驚いたことに、多くの出席者や講演者が宇宙でのセックスに関して何度も何度も発言していました。中には、一般大衆に向けて「セクシーな宇宙」を演出したいと発言していました。「宇宙とセックス」は宇宙観光ビジネスで最も人気があり期待されているアイテムなのです。

近い将来、人間は地球の大気圏外で生活するでしょう。時は宇宙観光の時代に突入しており、宇宙生活圏を作ろうと考えている人々は、当然「宇宙とセックス」について考え始めています。『宇宙セックス』を楽しんでいただければ幸いです。

1 章 すでに誰か宇宙セックスを？

クラブ“高度160キロメートル”

おそらく読者の方はこの本を手に取り、このように考えたことでしょう。「要点を知りたいだけ。これまでに宇宙で誰かがセックスをしたことがあるの？ 無いの？ じらさないでほしい。とにかく教えて！ あるの？ ないの？」

そうですね、この質問への答えは興味をそそるし、いろいろ複雑だし、説明するのに骨が折れます。でも動物を使った宇宙での交尾の実験レポートは存在するし、無重力で人間の男女がセックスを行ったドキュメントも有ります。とにかく読み続けてください。詳しい内容がわかります。

また、宇宙でセックスを行った人々の噂や推測も沢山ありますが、政府宇宙機関は認めていないし話題にもしていません。そのため、手に入れることができる証拠を注意深く見る必要が有ります。第1章ではこの「証拠」について述べます。誰か宇宙で性行為をおこなったことがあるのでしょうか。答えは、「恐らく」としか言いようがないのです。噂を証明する方法が無いのです。なぜなら、噂のご本人に聞いても真実は語らないでしょうから。ましてや、政府宇宙機関は絶対に証拠を明かすこともありません。それでは世間で言われている宇宙とセックスのこれまでの噂話を始めてみましょう。

ロシアより愛を

最初の男女が宇宙飛行を行ったのは、米ソ冷戦時代のまっただ中のことでした。この時代、米国ではセックス革命が起きました。旧ソ連では男女混合の宇宙飛行士のグループが初めて宇宙に打上げられました。このことが宇宙飛行士の間で愛が育まれたという噂の始まりだと思います。

世界で初めて宇宙飛行をおこなった女性宇宙飛行士は旧ソ連のワレンチナ・テレシコワ^[1]です。宇宙飛行は3日間でした。大抵の男性は宇宙の環境に女性は耐えられないと考えていました。理由は分かりませんが、旧ソ連は、その後の1982年まで女性宇

[1] ワレンチナ・テレシコワ：1963年6月16日、ボストーク6号に搭乗し、初の女性宇宙飛行士、そして初の非軍人宇宙飛行士に。個人識別用のコールサイン「カモメ」が与えられ、「私はカモメ」として知られる。2011年12月4日、ロシアの下院選にプーチン首相率いる政権与党統一ロシアから出馬・当選を果たす。ソ連邦最高会議時代以来、政界に復帰

宇宙飛行士を上げませんでした。この女性の上げから10か月後の1983年6月18日、米国は初の女性宇宙飛行士サリー・ライドをスペースシャトル・チャレンジャーに搭乗させて宇宙飛行を行いました。覚えておかなければならないのは、当時は米国と旧ソ連は冷戦中であり、お互いに絶えず先を争って競争していた時代でした。

ソ連の宇宙飛行士であり技術者のスベトラナ・サビツカヤは、1982年8月にソ連として二人目の女性宇宙飛行士となりました。サビツカヤは仲間の男性のレオニード・ポポフ宇宙飛行士とアレクサンダー・セルブロフ宇宙飛行士と一緒にいました。宇宙飛行したソユーズT-7宇宙カプセルはソ連のサリュート7宇宙ステーションとドッキングしました。宇宙ステーションにはすでに二人の男性宇宙飛行士が長期滞在搭乗員として生活していました。



旧ソ連のワレンチナ・テレシコフ女性宇宙飛行士。世界初の女性宇宙飛行士

つまり、ここで疑問がわいてきます。つまり、ソ連は宇宙で男女による性的結合実験を初めて行おうとしていたのでしょうか。この3人の宇宙飛行士の上げ以来、宇宙セックスの噂が飛び交いました。しかし私の調査によると、これは噂に過ぎず、実際は一人の女性宇宙飛行士が宇宙ステーションに男性と共に8日間滞在したことを聞いた人の想像に基づいた噂でしかなかったのです。

荒野に二人の男性と女性一人がキャンプに出掛けたと聞いてもなにも感じないと思います。でもその後に恋愛とか性的な出来事があったかも知れないと思うかも知れません。また、キャンプをした彼らのことを何も知らなかったとしても、彼らの間に親密な関係になる可能性を想像するかも知れません。このようなことを想像することは汚らわしいかもしれませんが、このようなことを想像するのは人間の性（さが）でしょう。この本を読んでいる理由も同じだと思います。

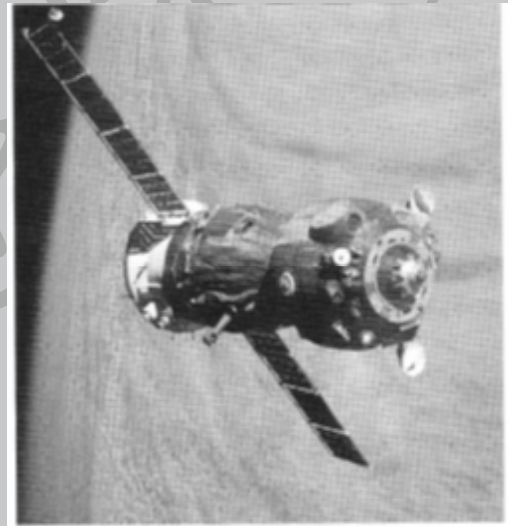
その証拠をお見せしましょう。ソユーズ宇宙船は直径が1.8メートル程度の狭苦しいカプセルで三人が座れる座席が三つ備わっています。いたるところに装置が並び、動き回る空間はほとんどありません。このカプセルに三人が詰め込まれていました。このような狭い空間で性的行為を行うことはほとんど不可能であることは理解できると思います。ただ小型乗用車の狭い後部座席でセックスをしている人は理解できるかも知れません。しかし、ソユーズカプセルのような狭い空間で二人がセックスをして

いる間、それを眺めている三番目の人が居たとは普通の人は考えません。普通の人ならこの状態ではムードは壊れますが、そうではない人ももしかするといるかも知れません。

多くの宇宙飛行士は、宇宙に到達後、一日目か二日目には宇宙酔い（宇宙適応症候群）を体験します。この症状は吐き気やめまいを感じますし、嘔吐や頭痛にも悩まされます。これではロマンチックなムードとはかけ離れている感じです。つまり、セックスを期待しているカップルの宇宙旅行者は、一日から二日は何もしないでじっと我慢する必要があるかもしれません。この間、宇宙ステーションや宇宙ホテルとのドッキングに時間が費やされるかも知れませんが、ふざけ合っただけの準備やさまざまな体位を考えることも可能でしょう。この話題については第2章「宇宙でセックスする方法」で詳しく取上げます。

ソ連のサリユート7宇宙ステーションは長さが約13メートル、直径が約3.6メートルの円筒形をしています。これは外形寸法です。多くの装置や備品が内部に積み込まれており、宇宙飛行士が動き回れる空間はほとんどありませんでした。ほんの数人の宇宙飛行士が生活できますが、決して快適な空間とは言い難い狭さでした。それでもソユーズカプセルよりも内部空間は広いと言えます。2機のソユーズカプセルが宇宙ステーションにドッキングしますが、カプセル自身が宇宙飛行士のプライベートな個室として使用されました。つまり、メイクラブのための空間が少ないながら確保出来たのです。

ソユーズカプセルT-7に搭乗していた3人の宇宙飛行士がサリユート7宇宙ステーションに到着したとき、アナトリー・ベレゾボイ男性宇宙飛行士とバレンティン・レ



米ソ共同プロジェクト。ソ連のソユーズ宇宙船に米国のアポロ宇宙船がドッキング。アポロからドッキングする前に撮影



ソ連の宇宙ステーション サリユート7

ベデフ男性宇宙飛行士に歓迎されました。この二人の宇宙飛行士をE O -1 宇宙飛行隊（イクスペディション）を呼びました。これで合計5人になった彼らは小さな宇宙ステーションの空間の中で一緒に生活することを余儀なくされたのです。ソユーズT -7の宇宙飛行士は科学実験装置、補給物資、さらに家族からの手紙を地上から宇宙ステーションに運び込みました。

一旦、一緒に生活し始めると、性格や人格の問題が浮上しました。最近アナトリー・ベレゾボイ男性宇宙飛行士から奥様に宛てた手紙が、クエストマガジン（歴史、考古学、超常現象等を扱う米国雑誌）に翻訳されて掲載されました。題名は「宇宙飛行の歴史」でした。この記事の中で、ベレゾボイは次のように書いています。「セレブロフ（男性宇宙飛行士）とサビツカヤ^[2]（女性宇宙飛行士）は猫と犬のように離れて飛行している。セレブロフは友人のゴシップネタを他人に広めるような人間だし、サビツカヤは責任分担された仕事以外のことでも積極的に行うような女性ではない。」このような記述からは、ロマンチックで性的に親密になる可能性のある宇宙飛行士とは考えにくいです。



スベトラーナ・サビツカヤ宇宙飛行士（ロシアでは宇宙飛行士をコスモノーツと呼びます。）

サビツカヤが宇宙飛行を終えた後に次のように語っています。「彼らはエプロンを付けて入り口（ハッチ）で私に挨拶しました。そしてその後に、彼女が「ふざけている宇宙飛行士を正し、仲間の宇宙飛行士と共に専門家としての協力関係を築き直しました。」と述べています。

たとえ、搭乗員全員との関係がうまくいったとしても、サビツカヤが宇宙でセックスを行うようなタイプの人間ではないと思います。サビツカヤの父であるユージン・サビツキは第二次世界大戦ではソ連空軍の副司令官を務め、二度にわたり「ソ連の英雄」にも選ばれました。サビツカヤは十分な教育を受け、すでに15才で曲芸飛行を一人

[2] スベトラーナ・サビツカヤ：モスクワ出身の女性宇宙飛行士。テレシコワ宇宙飛行の19年後の1982年に宇宙へ行った2人目の女性。サリュート7号に搭乗中、宇宙船外に3時間35分滞在、女性として史上初の宇宙遊泳。

で行った優秀なパイロットでした。恐らく彼女の生涯の成功の一部は父親の影響を強く受けたものと思われませんが、大部分は彼女自身が生れながらもっていた飛行能力と高い忍耐力によってなし得たものと考えべきでしょう。1982年8月10日からのイズベスチヤ（ロシアの日刊紙）の記事によると、「”押す（pressing）”は彼女の好きな言葉です。なぜなら彼女は決して”受け身”ではなく、自分の道も自分で切り開いてきたからです。」

このことが意味するところは、彼女が服従的なセックスアピールの強い女性によくあるステレオタイプではないことです。仮に何かロマンチックなことが起きたのであれば、最も有り得ることとしては、彼女の方から積極的にアプローチしたと考えられます。さらに彼女の父親の地位も与えられているので、いかなる男性も一人として危険を冒してまで彼女にアプローチするとは考えられません。たとえ男性が自らの妻に対して不誠実であったとしてもです。その上、サビツカヤは当時も現在も技術者と結婚しています。ご主人はイルーシン航空機設計局のビクトル・カツコフシキーパイロットです。

サビツカヤは睡眠を取るためにソユーズ T-7 カプセルを与えられましたが、同僚のベレゾボイ宇宙飛行士によると、彼女は他の宇宙飛行と異なった扱いを嫌い、他の宇宙飛行士と一緒に寝ることを選んだのです。さて、サビツカヤは、ほとんどの同僚宇宙飛行士がサリュート 7 宇宙ステーションに残っている中で、ソユーズカプセルをプライベートの目的で利用し、男性宇宙飛行士と親密な関係を作ることは可能だったのでしょうか。答えはイエスですが、かなり疑問に思います。なぜならこの年代の宇宙飛行では宇宙生活を秘密にしておくことははなはだ困難な状況にあったからです。

他の宇宙飛行士は中で起きたことについて知っていたと思われまし、だれかが他人にしゃべっていたと思われまし。他の男性宇宙飛行士も全員結婚をしていましたし、全員 KGB の審査に合格していました。KGB の審査は厳しく、これまで新人の半分以上の宇宙飛行士候補者は不合格でした。このことが性的行為に強い興味を抱かなかったという意味ではなく、彼女のキャリアに傷が付き結婚が破綻するようなリスクを冒すようなことはしないだろう、と言いたいのです。

1984年7月、サビツカヤはコマンダー（船長）のウラジミール・ジャニベコフとイゴール・ボルクと共にソユーズ T-12 号によって再びサリュート 7 宇宙ステーションに飛行技術者として搭乗しました。サリュート 7 では三人の男性宇宙飛行士と一緒にでした。EO-3 ミッション（ミッションとはさまざまな使命を受けた任務を遂行すること）のレオニード・キジム、ウラディーミル・ソロヴィヨフ、そしてオレグ・アツコフ博士の

三人です。この時点では宇宙ステーションはかなり混雑していました。サビツカヤとジャニベコフの二人は3時間半の船外活動（宇宙遊泳とも呼ばれています。）を行いました。船外活動はEVAとも呼ばれています。サビツカヤの船外活動は女性としては初めてのことでした。EVAの間、切断や半田付け、金属のコーティングなどに使用される宇宙の道具をテストしました。サリュート7に搭乗している6人の宇宙飛行士は様々な実験を行い、ステーション内の空気のサンプルも集めました。

あるタブロイド紙が推測しているような人間の生殖に向けた生物学的な実験を行ったとするレポートはどこにも存在しません。また、サビツカヤの場合、この大気圏外宇宙飛行の間に彼女が生殖実験に関係したと推測すること自体、おかしいことです。大変興味深いことに、サビツカヤは、「国際女性デー」に、サリュート7宇宙ステーションの搭乗員を全て女性にすることを指揮する予定でした。残念ながら宇宙ステーションの問題やソユーズT宇宙カプセルの能力不足などの問題で実現しませんでした。でも、もしこのミッション（任務）が成功していたら、それはそれで全ての女性宇宙飛行士に対する性的で非常識なうわさ話も広まったことでしょう。

米国航空宇宙局（NASA）は1999年に搭乗員全員が女性のスペースシャトル打上げを計画しました。NASA初の女性宇宙飛行士に一人、レア・セドンはこの研究の中心でした。しかしNASAは女性ホルモンを満載した“全処女”航海はなんら科学的成果が期待できないとして、このアイデアをお蔵入にしてみました。恐らくマスコミのさめた評価、冷たい見方がNASAの決定に何らかの影響を与えたと思います。

旧ソ連の宇宙飛行はどうだったでしょうか。そうですね、ソ連では別の二人の女性を上げました。しかし彼女たちは宇宙飛行士でもなければソビエト連邦の市民でもありませんでした。

最初は英国の科学者、ヘレン・シャーマン^[3]でした。1991年、シャーマンはミール宇宙ステーションへソユーズTM-21に乗って民間企業スポンサーの宇宙旅行のチャンスを手に入れたのです。ステーションに一週間滞在し、結晶成長に関するいくつかの実験を行いました。その当時のタブロイド紙は彼女の宇宙旅行についてかなり乱暴なコメントを書きました。シャーマンはレポートに対して、ミール宇宙ステーションではロシア宇宙飛行士（コスモノーツ）と素晴らしい体験をしたと語りました。その発言

[3] ヘレン・シャーマン：1984年に英国シェフィールド大学で化学の学士号を取得、ロンドン大学パークベック・カレッジで博士号を取得。ロンドンのゼネラル・エレクトリック・カンパニーで技術者として働いた後、化学者としてチョコレート調剤の香料の調整等に従事。チョコレートが好きでチョコレートの企業で研究

を裏付けるように、彼女が宇宙ステーションの中でピンク色のイブニングドレスを着ているビデオ画像が公表されたのです。この行動は彼女にとって冗談のつもりだったのですが、イブニングドレスが宇宙ではまったく実用的でないことは明らかで、ましてや宇宙でのセックスに興味があったとしてもこのドレスはまったく意味をなしませんでした。確かなことは、シャーマンは恐らく彼女の言葉で感じたことをビデオで伝え、タブロイ紙を楽しませるためにドレスを着たのだと思います。

第2章、「宇宙でセックスする方法」にて、宇宙で特別なランデブー（男女が密接な位置関係になること）のために身に着けるものについてより詳しく見てみます。

ロシア宇宙ステーション・ミールに搭乗する宇宙飛行士の心理面でサポートする心理的支援活動局と呼ばれる部署の匿名ロシア人職員に行ったインタビューで、フリーの歴史家で作家のピーター・ペサベントは彼の論説「地球と宇宙での隔離による心理的社会的影響」の中で次のように書いています。「シャーマン博士は冷静で聡明な人で他人と距離を置く人でした。彼女はまず第一に科学のスペシャリストと見られることを望みました。彼女と一緒に働いていた男性コスモノーツ（ロシアの宇宙飛行士をコスモノーツと呼びます）の期待とは違っていました」。この文化的行き違いと、シャーマンのプロ意識の強よさから、彼女の宇宙飛行は全て研究であり、タブロイ紙を楽しませようとした彼女のドレス着用の試みが憶測を生んで、彼女の期待とは反対のうわさ話が広まっただけだと、そう私は考えるようになっていきます。



英国初の女性旅行者ヘレン・シャーマン。宇宙飛行士ではありません。日本の秋山豊寛さんも正確には宇宙旅行者であり宇宙飛行士ではないという人もいます。宇宙飛行士は国家のために長い訓練を受けて特別な研究やミッションを実行する専門家を指す一方、そうではない一般民間人が民間のお金を支払って宇宙飛行を行うのは宇宙旅行者と呼ぶ傾向にあります。

旧ソ連が宇宙に運んだソ連以外の女性宇宙飛行士はフランス宇宙飛行士で医師のクラ

ウディ・エニユレ^[4]（旧姓クラウディ・アンドレ・デゼー、現在は宇宙飛行を退職して政治家）でした。1996年、クラウディはソユーズTM-24に搭乗してステーションに向いました。彼女は二週間滞在しました。2001年1月、彼女の次の宇宙滞在先である国際宇宙ステーションに向けてソユーズTM-33カプセルに乗って宇宙へ出発しました。滞在期間は8日間でした。筆者の調査した結果では、親密な関係を持ったという噂の根拠は見つかりませんでした。彼女の宇宙飛行はすべて研究のためと思われます。しかし、クラウディが仲間の宇宙飛行士との恋愛の末に結婚に至ったことについての話は別にあります。



フランス女性宇宙飛行で医師の士クラウディ・アンドレ・デゼー・エニユレ。現在は政治家

クラウディはロシアの星の町（スターシティ）での訓練中に、夫となるショーン・ピエール・エニユレに初めて会いました。彼らが地上訓練で会ううちに求愛し結婚に至りました。しかし宇宙での「合体」には至りませんでした。二人は一緒に宇宙飛行を行うことはなかったのです。ということは、二人は宇宙で婚姻関係を達成する可能性は無かったのです。二人とも管理職に就き、当分はESA（欧州宇宙機関）の宇宙飛行士として二人が同時に宇宙に飛行する可能性は全くありません。しかし、新しい宇宙観光産業が急成長することで、一般人のカップルが宇宙旅行者となって宇宙で愛を交わす可能性は高まってくるでしょう。

奇妙なことに、たった一人の女性宇宙飛行士（コスモノーツ）が宇宙に行っています。エリエナ・コンドコーバは1995年10月4日にソユーズTM-17カプセルでミール宇宙ステーションに搭乗しました。機関士（フライトエンジニア）として1995年3月22日までミールの搭乗員の仲間に加わりました。これは男女混合のチームで長期間宇宙に滞在する初めての試みでした。この試みは、宇宙とセックスについてのうわさが広まり、まことしやかに語られることとなりました。

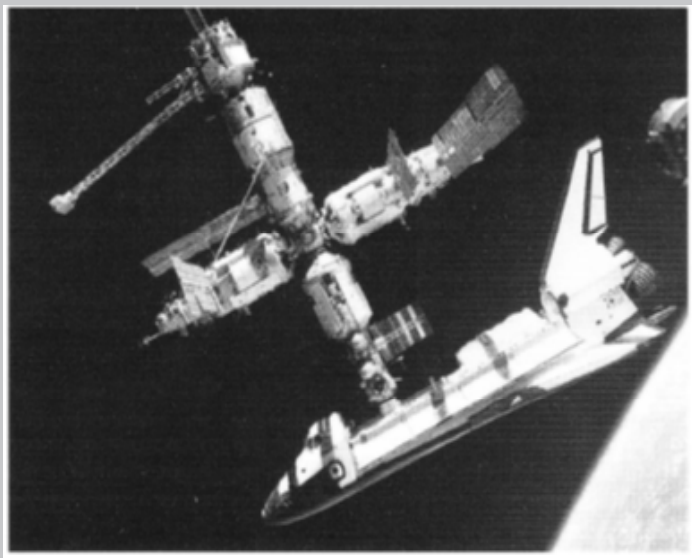
[4] クラウディ・エニユレ：医者、政治家、宇宙飛行士。1985年から1999年までフランス国立宇宙研究センター、1999年から2002年まで欧州宇宙機関で勤務。ソユーズTM-24、ソユーズTM-23、ソユーズTM-33、ソユーズTM-32に搭乗し、25日と14時間22分宇宙に滞在。

宇宙の恋愛

だれが最初に宇宙でセックスをしたか、という話題について、女性宇宙心理学者のシェリル・ビショップは次のように述べています。「もし私が馬券を買わなければならないとすると、ロシア人に掛けるわ。」彼女によると、ロシア人はアメリカ人のようには抑制されていないし、ミール宇宙ステーション^[5]には、ことをなすために十分な部屋があった、ということです。

フリーの歴史家で作家のピーター・ペサベント^[6]が書いた論説「地球と宇宙での隔離による心理的社会的影響」では、ミールのEO-17搭乗員のエレナ・コンダコーバ(女性)とバレリ・ポリヤコフ(男性)は、宇宙空間で親密な性的関係を持ったことを暗示しています。もし本当のことでしたら、コンダコーバとポリヤコフは姦通したわけです。なぜなら二人とも地上にはすでに結婚相手がいたからです。

親密な宇宙ランデブーの噂はギリシャの新聞“カシメリニ紙”が1995年2月に報じました。この新聞報道は、コンダコーバが「何かがありました」という言葉からヒントを得て書いた記事でした。ポリヤコフ(男性)が437日という長期間の宇宙滞在記録を塗り替えているとき、コンダコーバ(女性)とビクトレンコ(男性)は数ヶ月間の宇宙滞在を終わらせようと



旧ソ連のミール宇宙ステーションが米国のスペースシャトルアトランティスとドッキング

ロシア宇宙企業のRKK エネルギア^[7]社が公表した50周年記念ビデオには、コスモノーツのいちゃついている場面が含まれていたのです。このビデオでは、ミールに搭乗し

[5] ミール宇宙ステーション:ソビエト連邦が1986年2月19日に打ち上げ、2001年3月まで飛行を続けた宇宙ステーション。現在の国際宇宙ステーションの原型。最後は地球大気圏突入して焼失、一部が太平洋に落下。

[6] Peter Pesavento (1889 - 1976): 作家、歴史家。宇宙の歴史、特に旧ソ連時代に詳しい。

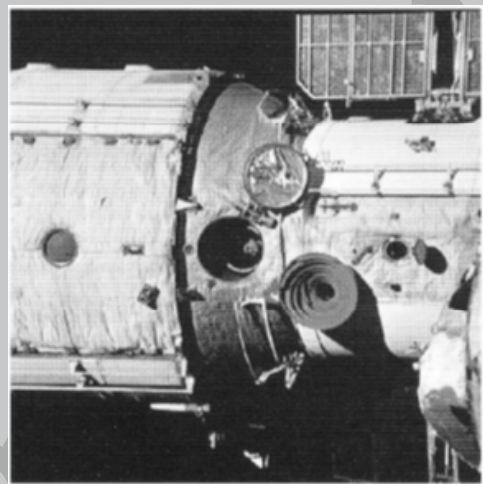
[7] RKK エネルギア (Energia): ロシアのソユーズ宇宙船、プログレス補給船、人工衛星などの宇宙機と宇宙ステーションのモジュール設計・製造会社。モスクワ近郊のコロリョフに本社

ていたポリヤコフ（男性）がコンダコーバ（女性）にふざけて水を吹きかけて彼女をびしょ濡れにしています。そしてコンダコーバは笑いながら水がかかるとのを防ごうとしているのです。これは明らかに楽しんでいるのですが、だれが見ても二人がふざけ合っていてじゃれ合っているように見えます。

恐らく、この”戯れ”事件後のある時点から、不可解な理由で、ポリヤコフとコンダコーバはお互いに会話することを止めてしまいました。メディアからこのことを聞かれたポリヤコフは次のように説明しています。「私はコンダコーバとは対立してしまいました。私が彼女の宇宙飛行中に十分な注意を払わなかったことが原因だと思います。しかし私の方もすこし不快な気持ちになったのです。なぜなら私の専門である医学的提案に彼女は無関心だったからです。でも、最後は理解し合え、私も彼女を無視することは正しいことではないとわかったので、私達の問題を話し合おうと提案したのです。そして彼女もその提案を受け入れてくれて、今は再び良い友人となっています。」

この記事でペサベントは、匿名の内部告発者からのロシア情報として、彼らのいがみ合った時期と原因について更にコメントすることを望ましくない、と述べています。

ポリヤコフ（男性）の言葉の中に何かが隠されている感じがしています。つまり「私は彼女に十分な注意を払わなかった。」は何を意味するのでしょうか。そして、普通の世の中で、「医学的提案」とは何を意味するのでしょうか。つまりこの二つの言葉には大きな矛盾があります。ある人は、これは単に恋人同士の口論だと見ることも出来ます。程度がどうであろうと、二人の不和は激しく、数週間も会話すらしませんでした。私の意見としては、会話をしない期間が長すぎると狭くて小さな宇宙ステーションでの生活は危険に満ちてしまいます。



バレリ・ポリヤコフ宇宙飛行士が宇宙ステーション・ミールの窓からスペースシャトルを眺めています

ポリヤコフは、コンダコーバとは専門的關係以上の何も無かったと噂を否定しています。でもあるインタビューで、「長期宇宙飛行で正常な性生活を過ごすことは望ましいことです。」と認めています。さあ、真実はどのようなのでしょうか。

アラン・ビーン（NASA 宇宙飛行士）は、かつて次のようにコメントしています。「誰もが“あれに参加”していない男女混合クルーには問題がありますよ。もし誰かが“それ”をやるんだったら、他のメンバーもそうしたいと思うでしょ。ある男性が満面の笑みを浮かべれば、他の男性は苛つくよね」。

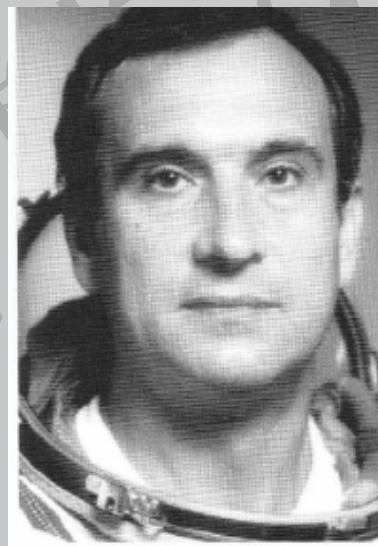
もしロマンチックで性的関係が二人の間に起きていたとすると、3番目のクルー、アレクサンダー・ビクトレンコ（男性）は気づいていたのか、或は止めようとしていたのでしょうか。小さなグループが狭い空間で長期間一緒に生活するときに、秘密をずっと守り続けることはなかなか難しいことです。もしコンダコーバ（女性）とポリヤコフ（男性）の親密な関係が存在していたのなら、ビクトレンコ（男性）は感情的なストレスを表し始めていただろうと、誰でも考えるでしょう。著者はいずれにせよ二人が親密な関係があったとする証拠は見つけていません。情報公開法は米国以外では適用されないのです。



エレナ・コンダコーバ宇宙飛行士は宇宙セックスを行ったと噂されました。

宇宙とポルノ

ミール宇宙ステーション滞在の最後の日、ロシアはミール宇宙ステーションの運用を継続するために必要な資金を提供してくれる投資家を探していました。真剣に検討されていたアイディアの一つが、宇宙ステーションに男女ペアの俳優を送り込み、映画を制作することでした。映画の最初の題名は「宇宙飛行の価格：Space Flight has a Price」といった感じでした。この題名は後に「最後の旅：ラスト・ジャーニ」に変更となりました。映画のストーリーは、次のような感じでした。宇宙ステーションに滞在している宇宙飛行士が予定を終了して地球に戻るよう指示されても、帰還を拒否しました。そこで地上管制官は素晴らしいアイディアを考えつきました。女性をステーションに送り込み、男性宇宙飛行士をそそのかして地球に戻りたく仕向ける、というものでし



（バレリ・ポリヤコフ宇宙飛行士 最長宇宙滞在記録保持者—宇宙飛行中に不倫をしたのでしょうか？）

た。なんと素晴らしい筋書きでしょう。

このプロジェクトはロシア人プロデューサー、ユーリ・カーラによって進められ、3人のポルノ俳優、ブラディミール・ステクロフ、ナタリア・グロムシケナ、オルガ・カボラが出演する予定であった。三人とも宇宙飛行士としての予備身体検査にはパスし、ステクロフは基礎的な宇宙飛行士としての訓練を終了しました。このポルノスター三人の体調は十分であり、宇宙でセックスを実行する準備は万全でした。当時のロシア宇宙局長官だったユーリ・コプテフは次のように説明しています。「数百万ドルの収入が提示される時、私達の生き方、考え方を変えまてしまいました。そして、紳士気取りも無くしました。」

悲しいことに、制作会社は、ロシア側が要求した金額の23億円のうち、7億円しか調達できなかったため、ミール宇宙ステーションポルノ映画は実現しませんでした。ロシア宇宙局は、なにはともあれ、まずは現金が必要でしたし、映画が公開された後に残額を支払うことにさえも確約しなかったからです。その結果、ミール宇宙ステーションは軌道を離脱し2001年3月に地球の大海原に衝突して沈没しました。

もしこの映画が制作されていたら、宇宙で制作された世界初のポルノ映画となったことは間違いありません。ポルノ産業は巨大産業ですし、この映画が実現していれば、世界中の人々が宇宙の無重力の中でセックスするユニークなシーンを見るためにお金を払ったことでしょう。制作者側は恐らくすぐにでも残金をロシア宇宙局に払ったと思います。しかしロシア宇宙局は映画制作という「ギャンブル」を快く受け入れることが出来ませんでした。

この映画が制作されなかったことは大変残念に思います。なぜなら、第2章「宇宙で愛を交わす方法」で詳しく述べていますが、無重力のなかでセックスの様々な体位をテストするのに絶好のチャンスだったからです。でも遅かれ早かれ、だ



宇宙飛行士訓練中のブラディミール・ステクロフ、初の宇宙ポルノスターになる予定でした。

れかが宇宙ポルノ映画を作るでしょう。制作費も通常の映画よりは安いでしょうし、言うまでもなく利益も確実に生み出すはずです。近い将来、宇宙観光事業や個人向け宇宙飛行ビジネスチャンスが到来するときに、別の方法で宇宙ポルノ映画が作られると考えられます。

その類の宇宙飛行士ではありません

米ソを含めた全ての宇宙ステーションを含めれば、男女混合クルーによる長期宇宙飛行が始まって20年以上が経っています。発表されている限り、これまで40人近い女性宇宙飛行士が男性と共に宇宙飛行を行ってきています。これまで宇宙での恋愛やセックスについて何か起きたとは聞いたことがありません。しかし同時に何も起きていないとする証拠も無いのが事実です。

長期間宇宙飛行について話せば、「もちろん、一晩か二晩を宇宙で過ごすのとは訳が違います。」と語るのは、セックス技術ネットコラムニスト、レジーナ・リン^[8]。彼女によると、「彼らは数ヶ月、あるいは1年間その場所にいるのよ。つねに男女一緒にね。当初は互いに魅力は無かったとしても、お互いにフェロモンもあるわけだし。」

NASA ジェット推進研究所で働く火山学者で主任研究者のロザリー・ロープス^[9]が、宇宙での恋愛を聞かない理由を説明してくれました。「確かに、宇宙で生活をしようとする場合、宇宙で遊ぼうと考えるわね。でも一般的には宇宙での私生活については公然と話すことはありません。ほとんどの宇宙飛行士は同じだと思います。」

不名誉なインターネット上のうわさ話があります。NASAは秘密裏に宇宙でのセックスの実験を行ったというものです。このうわさ話の発端は、1989年にアイオワ大学のだれかが投稿した記事が発端です。それ以来、この話は幾度となく修正され、あるときには1996年のスペースシャトルミッションで宇宙セックスの実験が行われたことが確認された、というものです。

このうわさ話は真実ではないようです。明らかにこれはコントロールが効かなくなった都市伝説の一つでしょう。たびたび話題になるSTS-75 ミッションではすべて男性宇

[8] Regina Lynn 1971年生れ。女性コラムニスト、ブロガー、作家、セックス技術専門家。某雑誌の「性的意欲：Sex Drive」コラムで性的技術について長年コラムを書き続けた。

[9] Rosaly Lopes：惑星科学者、人工衛星を利用した観測によって惑星の地殻変動や火山活動を専門に研究